



人間の根源的で 普遍的な問いへの挑戦

山本雅基

在宅ホスピスケア施設「きぼうのいえ」施設長

『臨死体験』

著：立花 隆

1994年単行本、2000年文春文庫

定価：上巻700円、下巻670円(税込、文庫版)

文藝春秋、0120-877-325



■臨死体験とは

本書は1991年に放映された「NHKスペシャル」の取材記録のうち、お蔵入りする運命であった膨大な資料を立花隆氏が再構成して、世に問うた大著です。臨死体験とは、病気や事故などで死にかかった人が、九死に一生を得て意識を回復したときに語る、不思議なイメージ体験です。立花氏は、経験者の証言に対する客観的評価、信憑性に多面的な吟味を加え、執念ともいえる知識への欲求にしたがって、臨死体験の本質に迫ろうとします。臨死体験に関する類書は邦訳だけでも現在、数十冊が出版されていますが、本書はこの現象を総合的に知るに適したガイドブックとよんでよいでしょう。

臨死体験が現代において脚光を浴びたのは、死生学で著名なエリザベス・キューブラ・ロス博士の研究と、バージニア大学で精神医学を学んでいたレイモンド・ムーディー博士が発表した『かいま見た死後の世界』（評論社、1975年、原題“Life after the life”）が端緒です。それまで世界中のあらゆる伝承、文学、文化現象、また言うまでもなく宗教という次元で、人間の「死」についての探求は続けられてきました。

■2つの解釈

立花氏は世界中の死生学者、心理学者、脳科学者がこの現象からどのように啓発を受けて研究を展開したかを記述しながら、それぞれの見解に厳しい批評を加えていきます。論及は多岐にわたっているため、この拙論ではごく大まかな要旨のみ紹介することにしましょう。

まず、臨死体験の原因は2つに大別されます。あくまで脳内の現象にすぎないとする「脳内現象説」と、体験の主体となる意識が実際に体外離脱して肉体では到達し得ない場所へ赴き、さまざまな体験をしていくという「現実体験説」です。

実に多くの事例と検討が紹介されていますが、特に私の印象に残った2つの体験をここに引用します。また、その前に、私は「現実体験説」に同意する立場であることを表明しておきます。本人が体外離脱をしていなければ知りえない客観的な証拠があるケースが存在するからです。

事例1：他人の車のナンバーを見、祈りの内容がわかった

ヨーロッパのある峠で車の多重衝突事故に巻き込まれ、重症を負った人がいました。複数の医師

が彼の死を確認し、立ち去りますが、彼はその最中、臨死体験をしていたのです。事故現場の周辺を見ると、上下線とも大渋滞で何千台という車がつながっています。彼は、その車に乗っている人々の考えていることがわかるのでした。全員が渋滞に苛立ち、腹を立てていました。しかし、1人だけ、事故で怪我をした人のために一生懸命に祈っている女性がいるのを彼は発見します。彼女は1人でも多くの人助かるようにと祈っていたのでした。彼は感動して、その女性の車のナンバーを覚えさせます。蘇生して助かると、彼は女性の車を探して会いにいき、あのときあなたはこう祈っていたと言うと、はたしてその通りだったのです。これはスイスでは有名な話で、このような事例は脳内現象説では説明がつかないものです。

事例2：見えないはずの場所の靴が見えた

ワシントン大学医学部教授のキンバリー・クラーク・シャープの若き日の体験です。彼女は大学院生時代に病院でソーシャルワーカーの仕事をしていました。そこで1976年、臨死体験をした患者に出会います。名はマリア。メキシコから来た50代の季節労働者で心臓発作に襲われ運ばれてきます。入院3日目、心臓が突然停止。マリアは2階の救命救急室で、心停止の警報に医師や看護師が駆けつけるなか、さまざまな処置を受けました。

マリアは蘇生します。その後、キンバリーがマリアによばれて会いにいくと、彼女はキンバリーの腕をつかみ、看護師が蘇生処置をほどこしているとき、自分は身体から抜け出して、天井から一部始終を見ていたと語り始めます。それは典型的な臨死体験でした。救命救急室内の様子をマリアは正確に語り、さらに話し続けます。自分は室内の天井から瞬間的に移動して、病院の3階の窓の外側にいました。その窓枠の下のところがちよっと張り出しており、ブルーのテニス用シューズの片一方がのっけているのを見つけます。靴の小指部分がすり切れていて、靴ひもがかかとの下にたぐり入れられています。それを探して取ってきてくれとマリアはキンバリーに頼みます。あまりに真剣なので、3階に上がり、部屋を回り窓をのぞいて歩きます。驚いたことに、ある病室の窓に、マリアが話した通りのテニスシューズがあったのでした。

自分の蘇生処置を見下ろしていた、という話ならば脳内現象説でも解釈し得ます。キンバリーも、聴覚情報をもとに頭のなかで再構成されたイメージと考えました。しかし、このテニスシューズの

場合は、そこに靴があるという情報を、彼女が得られるはずがありません。何かの情報をもとに作り上げたイメージではないのです。そしてそこに靴が本当にあったのですから、それは夢でも幻覚でもありません。

■無知の知、謙遜

現在、医学や看護教育のなかで、「臨床的なデータとしての死以外の事実」にどれだけの人々が眼を向けているでしょう。

私は東京の通称、山谷地区で、在宅ホスピスケア施設を運営しています。その「きぼうのいえ」には、多くの医学生、看護学生、現役の医師、看護師が見学を訪れます。しかし、彼らと話し合っていると、臨死体験が伝えるような人間理解への手がかりや思考を教育研究機関から教授されたことはないと言います。科学の俎上にのらないものは存在しないとする、人間の傲慢さはいかばかりでしょう。物質主義のただなかで教育を受け、そのフレームのなかでのみ価値が与えられていきます。

しかし人間は、脳の仕組みについてさえ、末端の機能についてようやくそのメカニズムが見えてきた程度であり、どのようにして、眼球から視覚が生じ、脳がそれを外界として理解するかのシステムについては、まったくといっていいほどわかっていないのが実態なのです。私たちは、もっと謙虚に無知の知を認め、人間の小宇宙の無限に広がる世界に向き合うべきでしょう。

■私たちは肉体の生を終えてどこへいくのか

この書との出会いは私の混沌とした死生観に、整理された情報と個人的な確信を与えてくれました。それは物質的存在に対する、非物質的エネルギーの優位への導きであり、肉体的な生に限定された生存に対する、肉体を超えた存在とその永続への確信です。

立花氏自身はもっと中立的な結論なのですが、日々命の来し方、往く末が交錯し切り結ぶ現場に身をおく私は、この書から得たものが信仰においてではなく、事実として迫る死生観の形成に大きな影響を与えてくれたことに感謝しています。

きぼうのいえとよぶこの在宅ホスピス施設に満ちているスピリチュアリティに、この書物が大きな示唆と影響を今後とも与えてくれることを期待してやみません。